

火星



七曜抄

山尾玉藻

トアロードを曲がつてきたる秋の風

真つ暗な鯔の海見て話しけり

十三夜咳ばらひして父のゐる

考へのまた葛原に及びけり

もみぢして鳥獸戯画を蔵す山

黄落やテナーサックスのけ反りぬ

空海の池照つてゐるきぬかつぎ

枯蓮の池の半分日当れる

夕ぐれの手が橙を呉れにけり

炭斗に椿の花を拾ひ来し

火星作品

山尾玉藻選

音ありて瀬戸物市の秋日濃し
鉢植ゑに影一つづつ秋澄みぬ
五六羽の鶏小舎の秋日和
颯風圈に入る高階の灯りかな
猪垣や家になれぞれ坂の道
占へる木の實につやの生れにけり
抓みたる泥鰯が哭けり秋の暮
曼珠沙華雨をのこして晴れにけり
十六夜の壺提げて来る妻の客
コスモスの畑の鴉を囓ひけり
餘部の脚より湿る盆の棚
のぼさんと根岸のひるの糸瓜かな
ポマードの兄が二階に秋早

豊中 廣畑 忠明
明石 戸栗 末廣
神戸 深澤 鱧

盛塩の位置変りある良夜かな
溝蕎麦や川水汲みにゆく馬穴
牛の鼻霧の斜面をのぼり来し
霧の香のしづくとなれり鳥兜
無花果の下レグホンの放し飼
鹿垣へボタン信号押しにけり
菜を洗ひ茶碗をあらひ秋の川
蒲の絮とぶ日和なり壺坂寺
金魚田にあぶく片寄り秋祭
ゆきつきし色となりけり種なすび
頸こつてくびの運動目白くる
いなびかりマイナスイオンと思ひをり
鳥渡る運動場の万国旗
姦しき一樹のつるべ落しかな
蜂の子飯を炊くピンセット置かれあり
とろろ汁揺りつばなしで姉逝きし
ぬくめ酒刺虫捕りで終はりし日

吹田 伊藤多恵子

大和郡山 吉田康子

宝塚 杉浦典子

選のあとに

山尾 玉藻

鉢植系に影一つづつ秋澄みぬ 廣畑 忠明

へもの置けばそこに生れぬ秋の蔭 虚子を想起するが発想は別にある。「鉢植系に影」の具象が良い。鉢に植えられている一つ一つはそれぞれ種類が違い、それぞれの特徴が「一つづつ」影となっているのである。「秋澄みぬ」の季語も影の印象を鮮明にして適確。この作者の作品は物欲しげさが無く、作爲が無い自然に授かった句である。しんとした秀句である。恒星園作品へ稔り田に弔慰電報読まれつぐも佳句である。

いなびかりマイナスイオンと思ひをり 吉田 康子

「マイナスイオン」と言う言葉を最近よく耳にするが、リラックス効果や病気の症状を軽減するイオンらしい。「いなびかり」の後の爽やかさは確かにリラックス効果がありそうだ。同時作へゆきつきし色となりけり種なすびの発想に珍しさは無いが表現が適確であり秀逸である。

青空より雨降る後の彼岸かな 大山 文子

「青空より雨降る」は勿論日照雨のことであるが、青空を

強く意識する表現をとったのである。「彼岸」には春と秋があるが、「青空より」で秋の彼岸の句となった。

大仏に鼻の穴あり稲光 田中 英子

「大仏に鼻の穴」が大きいと言う印象は誰もが持っている。が、稲妻の閃光に浮かび上がった「鼻の穴」は殊に大きく、作者は驚いたのである。「大仏に鼻の穴あり」と当たり前のことを述べただけの表現が、この句では最大の効果となっている。

月の出はバオバブの花咲くといふ 岡 和絵

「バオバブ」はアフリカ産の幹が徳利状の樹であるらしい。但しこの句の場合、花と言うよりは「バオバブ」と言う韻が一句に合った。こう表現されるとなるほどと納得する。

色鳥の色につめたき箒かな 小池 楨女

普段見る鳥も「色鳥」と言われれば美しい。原色の混じる「色鳥」の端正さに、温かさよりむしろ冷たさを感じるものである。「色につめたき箒かな」の俳句的処理に計らいは無く、自然で抵抗が無い。

萩叢に暮色の水の流れをり 松山 直美

パンパスのような明るい萩の穂は「暮色」の中に何時まで

も残っている。しかし大いなる葉叢の裾はいち早く暮れる。「暮色の水の流れをり」の巧みな表現は嫌味が無く、美しい。

芋の露月の兔が太りだす 築田たかゑ

感覚と言うよりは感性の句である。月が太るのであれば普通、しかし「月の兔」が太るのである。情景としては兔の形がはっきり見える夜ととるべきであるが、「芋の露」は普通昼を想定する季語である。こう言う感性の句は何やらこれで納得させられるから不思議である。

一枝切り一木の露浴びにけり 加藤 廣子

〈蔓踏んで一山の露動きけり 石鼎〉の雄大さには到底及ばないが、「一枝切り」に女性らしい独自性がある。「浴びにけり」も読者に見える情景として成功している。掲句は石鼎の句があつてむしろ生きてくる句と言えるであろう。

台風情報ばかり見てをり夜更けたり 山田 和子

この「選のあとに」を書いて今、新潟中越地震が起こった。今年には台風の被害も多く大変な年となった。掲句は地震情報でなく「台風情報」で一句となった。「台風情報」は刻々と移り変わるが、これがこの句の生命である。「見てをり夜更けたり」の平凡な表現に共感を覚える。この俳諧仕立ては、この台風が作者の家には殆ど影響しないことを示している。

梵鐘の近くの萩のこぼれやう 山崎 道子

「梵鐘」の音で「萩」が零れるのを実際には見たことが無いが、「萩」の花なら本当と思えてくる。「こぼれやう」と言う下五の表現がなんとも良い。「萩」の花は真下に零れているのではなく、鐘の音から遠ざかるように零れているのである。繊細な情景を繊細な表現で言い果せている。

秋暑しかすかに残る力瘤 櫻井 眞澄

夏の暑さ(暑し)と秋の暑さ(暑し)の季語の違いを間違いないく捉えている句である。「かすかに残る力瘤」が言い得て面白い。私の主人もこの通りである。俳諧味充分な秀句。

長旅の嬰帰りきし秋ざくら 吉野 陽子

果して「嬰」の表情に「長旅」の疲れが見えたかどうかは解らない。あくまで作者自身の「長旅」に対する思いである。兎に角作者は安堵しているのだ。「秋ざくら」も程よい。

赤とんぼ何時も静かに来てあたり 島田 厚信

この平凡な表現の中に「赤とんぼ」の季語の本意が捉えられている。良い句である。(以下略)

玉藻俳句鑑賞

火祭りのはじめ熊笹にほひけり 玉藻

〔火星〕平成十五年十二月号より

一泊吟行の鞍馬の火祭りを詠まれた三句のうちの一句である。洛北鞍馬山の韮神社ゆきの祭礼で、少年達の松明から始まって三メートル余りの大松明が全山を火で埋め壮観である。

鞍馬の山々が少しずつ暮れはじめ、街道には篝に火が点き始めると期待に胸がふくらんで来る。その頃の熊笹のしんとした山の匂いを、昂奮の前の静けさに感じとられた。

（高子）



恒星圈

戸栗末廣

おのころに足踏み入るや威銃
蝦夷鹿の澄める眼を畏れをり
突風へ立ち上がりたる芒なり
秋の蠅まぶた重たき日なりけり
秋水を甕のめだかに足しにけり

田中英子

戸田春月

秋風やマクドナルドの屋根まはる
鮎落ちて煙草短く吸ふことも
膝の上の都こんぶと秋扇
いちじくの割れ目に添うて割りにけり
鬼蜘蛛に風のきざはしありにけり

コツペパン音させて切り百舌鳥日和
香久山は女^めの姿なり菊枕
龍胆や角^{みづら}髪を結へる太子像
劍道の袋触れゆく曼珠沙華
夜遊びの照らし出さるる稲つるび

田中みゆる

長屋璃子

奥つ城にレース編みせる鳥瓜
煩惱をコスモス畑に置いて来し
秋風や青岸渡寺よりまづ一步
秋の航中突堤に渦残し
天地の暴れし跡の彼岸花

榎檀の実突とあらはれ路地歩き
筆硯を揃へ良夜の二月堂
不器用な手より螺旋に梨の皮
水族館生まれのいるか水の秋
草の実をとばすも神の御手なれば

獅子座

山尾玉藻推薦

吉田康子

花茗荷日和なりけり壺坂寺
トランペット山へ吹きぬる盆のあと
力石の湿りてゐたる秋の昼
露けしや熊野古道の石の形

波田美智子

母子して美容体操蚯蚓鳴く
瓢箪の蔓に囲まれ幼稚園
夕暮のつくつくぼふし犬とゐる
頭蓋の写真見せらる秋桜

加藤君子

鞋なる文字引いて見る月の卓
秋思してわたしそのまま季語となる
咲き切つてしまはぬ萩のこぼれやう
マラソンの腰のお守りアテネの夏

丸山照子

火の山の霧に奥あり人のこ糸
霧晴れし宇治より望む男山
澄む水の歩板をわたる法被かな
深吉野を父とめぐれり秋日影

河崎尚子

列車待ちの筋子どんぶり波の音
語り部のつつかへをれば猪おどし
海沿ひの参詣道の青みかん
熊野詣の女人に釣瓶落しかな

松井倫子

キリギリス立方体に草積まる
遠稲妻岩場を後向きに下る
天上川を列車抜け来ぬ昼の虫
秋澄むや裾野を上る熱気球

土屋酔月

丘あれば野川のあれば曼珠沙華
青空といふ語のありし秋の嶺
雨降つてたちまち秋の真中なる
青柿の落ちしあたりの日昏れかな